

北九州市立大学 地域創生学群

「地域活動における ジェネリック・スキルの養成」

～AP・CP・DPの連続に向けて～

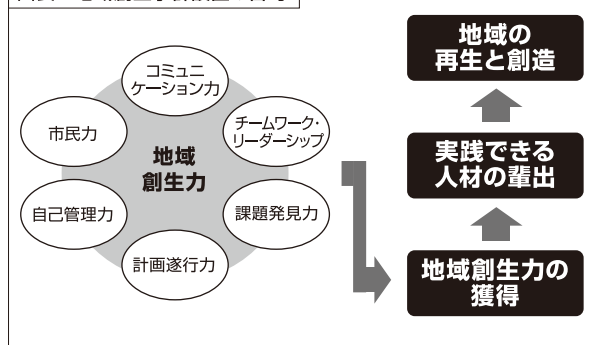
北九州市立大学
地域創生学群 教授

真鍋 和博

[2011年9月3日 福岡市電気ビル]

地域の多くの方々の意向を踏まえ、この能力の設定をいたしました。つまり、学生には4年間のカリキュラムを通じて地域創生力を獲得させ、知識だけでなく地域創生力を駆使して地域の再生と創造を担う人材に育ってもらう、というのが学部設置の目的です。

図表1 地域創生学群設置の目的



1. 地域創生学群の概要

設置の背景と目的

北九州市立大学の学部構成は、伝統的な文科系学部が4つあったところに別キャンパスで国際環境工学部を作って総合大学になり、地域創生学群という新しい学部が加わりました。学生数は約6,000名です。地域創生学群の設置は2009年で、まだ3年目です。現在3年生までが在学している状況で、完成年度に達していません。地域創生学群が、学群という他大学にはあまり例を見ない形態をとっている理由は追って説明します。

まず地域創生学群の概要ですが、コース制をとっており、地域マネジメント、地域福祉、地域ボランティア養成という3コースがあります。地域福祉コースは社会福祉士の養成課程となります。

特徴としては、社会人特別選抜の定員が40名あることです。実際の入学者は定員には満たないのですが、学生たちは社会人と一緒にゼミを受けています。

入試は社会人特別選抜以外ではAO入試と一般入試を合わせて50名で、学部としては比較的小さな学部といえます。後からさまざまなデータをご紹介しますが、それは社会人は除いたものになっています。

地域創生学群設置の目的として、「地域の再生と創造を担う人材の育成」を掲げています(図表1)。

その目的を実現するために「地域創生力」という能力育成指標を設定しました。これは社会人基礎力や学士力、基礎力などの既にある類似の能力体系を分解・整理し、それに加えて、特に市立大学ならではの特徴でもある

実習・演習を相互に組み込んだ教育システム

カリキュラムの特徴は、まず1年次から演習と実習が必修となっていることです。図表2の上段が実習科目で下段が演習科目です。1年次の実習は指導的実習プログラムとなっています。2年次になるとコースごとに分かれた実習を行います。地域マネジメントコースと地域福祉コースは「地域創生実習Ⅰ」、地域ボランティア養成コースは「スポーツボランティア実習Ⅰ」「障害者スポーツ実習Ⅰ」の2つが入ってきます。そして3年次へと続いていきます。2・3年次の実習は通年2単位となっています。

次は演習ですが、演習は1年次から4年次まで設置されています。つまり4年間、演習、実習、演習、実習と繰り返します。今はまだ4年生がいないので検討中ですが、卒業論文・卒業実践報告という名称のコマを設定しています。これは単に論文を書くのではなく、地域の中で4年間実践してきたことを報告書にまとめるという構想です。

本学が「学群」という形態をとった理由ですが、開講科目を学際的に幅広くするためです。法律、福祉、経済、経営、ボランティア、NPO、情報関係など相当幅広い科目を提供しています。これは地域の再生と創造を担う人材を育成するといったときに、地域の問題というのは専門的知識を持っていれば解決できるという問題ではなく、どちらかというと多面的に捉えてアプローチをしていく解決方法が必要だという思いがあったからです。

それで学生は幅広い分野の授業が選択できるようにし、他学部から授業を提供していただけるように、学部ではなく学群という組織にしています。

私も所属は基盤教育センターというところですし、

キャリアセンターの先生も教えます。都市政策研究所というシンクタンクも設置されていますが、ここの教員も演習、実習、講義を担当しています。このように、学生に多様な科目を提供しているのが地域創生学群です。

1年次	2年次	3年次	4年次
指導的演習プログラム	地域創生実習Ⅰ スポーツボランティア実習Ⅰ 障害者スポーツ実習Ⅰ	地域創生実習Ⅱ スポーツボランティア実習Ⅱ 障害者スポーツ実習Ⅱ	地域創生演習C・D 相談援助演習5 卒業論文・卒業実践報告
地域創生フォーラム			
地域創生基礎演習A・B	地域創生基礎演習C・D 相談援助演習1・2	地域創生演習A・B 相談援助演習3・4	
<ul style="list-style-type: none"> ●地域創生学群 専門基礎科目 専門科目 ●基礎教育センター ビジョン科目 スキル科目 ●テーマ科目 情報教育科目 外国語教育科目 			

地域創生学群の サービス・ラーニング

地域創生学群の大きな特徴の一つは実習です。実習には多様なメニューがあり、だいたい30程度の実習プログラムが同時に動いています。たとえば「まちづくり」系の実習では、商店街のなかに入り込んで「商店街の活性化」に取り組んでいるチームがあります。「農業」系の実習では小倉南区のタケノコが有名な合馬（おうま）という地区で農産物直売所を手伝いながら地区の活性化についていろいろ学んだり、八幡東区猪倉という地区では、地域の農家から広い畑と宿泊できる長屋を借りて、学生は土日に泊まりがけで行き、地元の方に農業を教してもらいながら作物をつくりつつ地域の方と交流するような実習もあります。

それから「組織運営」があります。学内に地域共生教育センターというボランティアセンターがありますが、ここの運営を学生たちがやっています。

さらに、広報実習では、地域創生学群の冊子を学生が作っています。教員が忙しいので学生ができることは学生にさせようという考えもあります。他にイベント系では、オープンキャンパスや高校の先生方がいらっしやる説明会なども学生が企画しています。これも実習のひとつです。あとはFM番組制作があります。

福祉コースの場合は、自閉症児を対象としたキャンプを企画運営したり、車椅子バスケットや車椅子テニスなど障害者スポーツ系の大会にボランティアとして参加したり、それからスクールボランティア、NPO法人サポートなど多様な実習が行われています。入学したときから、今の3年生は3年間ずっと関わっています。

適性を見きわめた選抜の方法

以上が本学の教育システムの特徴ですが、地域の再生と創造を担う人材を育成するときに、自分の意見をしっかりと伝える、自律して行動できる、という素養が実はとても重要です。地域創生学群の学生たちは1年次から地域に入り、地域の方と一緒に地域の問題を解決するということをさまざまな分野で展開していくからです。

その素養を見極めるために入試に工夫を凝らしています。この場で細かい話をすべてはできませんが、まずAO選抜に関しては、1次選考は模擬授業を受けてレポートを書く、それで200点換算します。2次選考は面接で、これで決まります。面接は重視します。

一般選抜では、センター試験は2教科2科目、国語ともう一科目は点数が高い科目です。

個別学力試験では、小論文100点、面接100点、活動・資格等実績申告書を100点で換算します。これはたとえば、部活動だったらどの競技でどのような成績をあげたかを点数化します。たとえば、硬式野球で甲子園に出場したという点数は高くなります。部活動だけではなく、ボランティア活動とか生徒会活動とかあらゆる活動を「活動・資格等実績申告書」に盛り込むことができます。それから資格取得。それらをすべて点数化し受験生の素養をみていきます。しかも2012年度の入試から、この面接の点数を200点に上げる計画もしています。

入試で行う「特徴的な面接を実施」というのは、私を含めてもう1名、民間企業で人事を経験していた者が行う、基本的に入社面接のような面接のことです。グループディスカッション、あるいはソーシャル・スキル・トレーニングと言われるもので、受験生たちをその場でグルーピングし、課題を与え、スタートさせ、あとは見ているだけの面接です。そこで積極性や他者への配慮ができるかなどを面接官は見ます。

おかげさまで3年連続で入学倍率は高倍率を維持していて、2009年度と2011年度入試は、12倍程度でした。また、2010年度は24倍ほどでした。今までは6人ぐらいのグループでやってきましたが、その場合6人のうち一番よかった受験生が入学できるかどうか、といった状態です。ですから非常に優れた学生が入学してきます。私たちが狙っている学生が入ってきてくれるという状態はかなり恵まれています。

このような出願状態なので、入試を重視できています。グループのなかに入っても積極性があるだけでなく、周囲にしっかりと配慮ができて、自分の意見が言える、そういう受験生をこれからも入学させたいと強く意識しています。

2. 地域創生学群の ジェネリック・スキルの特性

地域創生学群1年生のリテラシーと 他大学との比較

このような入試で合格した地域創生学群の学生はどんな学生かという、まずPROGのリテラシーテストについて図表3の棒グラフの上から順に見ていきます。

1番上が2010年度の入試で入学した学生です、一般選抜で24倍となったときです。

2番目が2011年度入試、今年度の1年生です。一般選抜の倍率が12倍ぐらいでした。

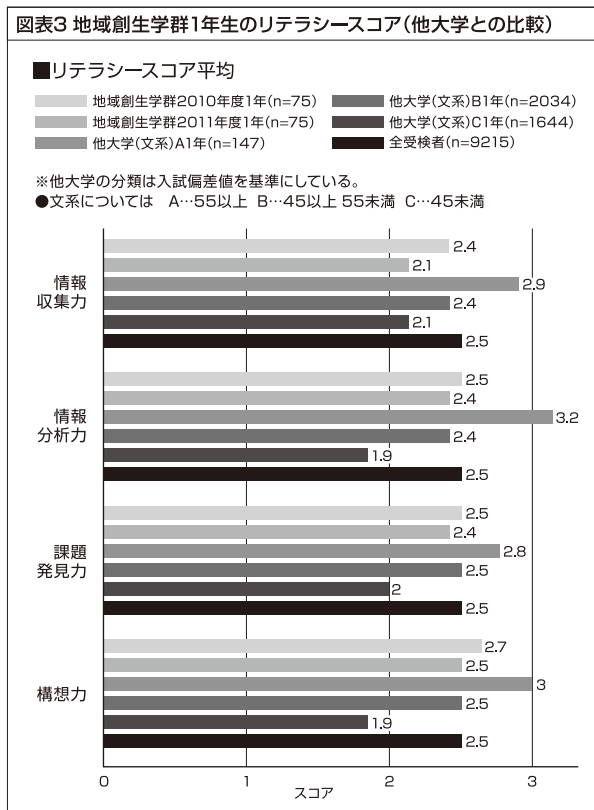
3番目が他大学の文系A群(入試偏差値が55以上の大学)。

4番目が他大学の文系B群(入試偏差値45~55の大学)。

5番目が他大学の文系C群(入試偏差値45未満の大学)です。

このグラフから見ると、リテラシーに関して本学はB群ぐらいです。

ところが、まだ精緻な分析はできていませんし、パネル調査ではないため学生の成長は追えないのですが、2011年度の3年生のリテラシーテスト結果を見ると、たとえば構想力はA群の大学の数値より高くなったりしています。かなり頑張って追いついているのかと思います。このあたり私自身興味がありますし、追って分析をしていきたいと思っています。

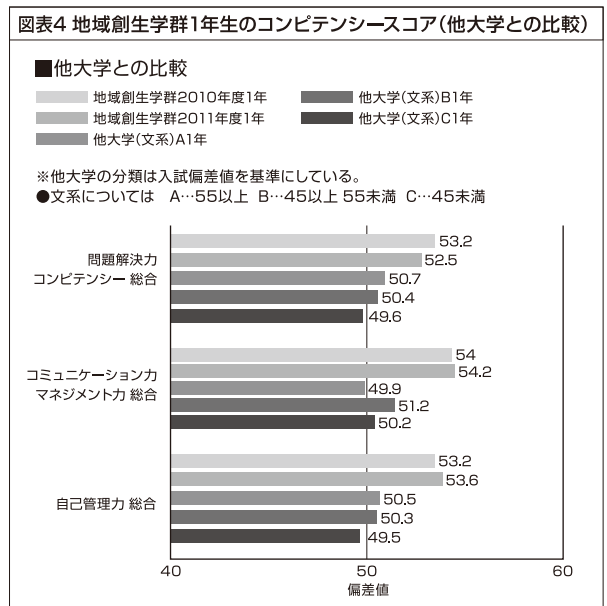


地域創生学群1年生のコンピテンシーと 他大学との比較

次にコンピテンシーの話をする。地域創生学群の2010年度と2011年度の1年生はそれぞれ図表4の棒グラフの上から2本です。特にコミュニケーション能力は他大学と比較してダントツに高い。これは先ほど申し上げた入試方法で入学させているのですから、その結果が出たのだと思います。グラフに示していませんが、3年生になると、若干、伸びが鈍化しています。この解釈は難しいのですが、能力水準としては、相当高いところに来ていると思います。

また、コンピテンシーの中で、自己管理能力や実践力は他大学と比べても非常に高いと思います。

ちなみに、2010年度の統計では、入学偏差値では本学の文系5学部の中で、地域創生学群が一番低いレベルなのですが、GPAは学部別では全学で1番でした。GPAの精度の問題もあるので参考資料程度ですが、そのような結果も出ているということです。



3. まとめ

学生の成長を促す要因は何か

日常的に実習コーディネーターとして学生と一緒に地域の中に入ってさまざまな活動をさせていただいている私としては、次のようなことが学生の成長を促す要因だと考えます。

まず最初に、活動の目的、目標設定・共有を学生と地域の方と一緒にやります。それからチームをしっかりと作っていく。この2つは事前学習の部分でやらなければいけない

ことです。うまくやれているところはよい活動ができて
いるけれども、うまくやれないというチームは活動が
滞っていきます。

それから成果発表などのアウトプットの機会が重要
です。

また、教員は与えすぎないことが大切です。ペース
メーカー、ファシリテーター、といった役割に徹すること
を意識して、学生の主体性を担保しなければいけないなど
思います。

とは言いつつも一方では学生を追い込むことも徹底的
にやらなければならないと思います。もう右も左も逃げられ
ないような状況を作って「明日までに絶対にこの作業をやら
なければいかん」というように追い込んでやり遂げさせる。
これはかなり意識してやっています。

最後にまとめをお話します。まだ分析、統計上では
精緻な答えは出せませんが、学生の基礎力、能力を伸ばす
のに有効なのはサーブिस・ラーニングやプロジェクト・
ベースド・ラーニングだと思われます。そのためには、
何よりも素養のある学生を入学させることが重要だと
私は思っています。

それから学生の基礎力、能力を伸ばすための教員の
関与は、教育者というより支援者であるべきだと考え
ます。しかし、地域創生学群は実はかなり学生に厳しい
です。相当叱ります。「呼び出し」は日常茶飯事ですし、
原稿用紙40枚くらいの手書き反省文を書かせたり、という
ことも行っています。それを理解しないと地域に出せま
せん。遅刻などは言語道断でとても叱ります。しかし1年
生の時に、徹底的に指導すると、2~3年生になるとかなり
学生が慣れてきます。

でも、これは特別なことではありません。アカデミック
教員でも論文指導で同じようなことをやっていませんか、
と常に学内では言っています。

今回のPROGテストの結果については、ディプロマ
ポリシーやカリキュラムポリシーを議論するときの素地に
なるかと思えますし、学生の現状を把握するには重要
です。ただ、能力というのはどこまで正確に測定できる
のかということも常に意識しておく必要があると思
います。